

# ブレイブ・ニュー・サンライズ

——ポストモダン「原爆」体験「回顧録」——

バーナビー・ブレードン  
Barnaby Braden



Victor Rubin, *Mein Gott Mein Gott* (1981)

## 1 はじめに——Strawberry Time

「時間」は止まった／高潮に達すると穏やかであるが／下げ潮に向かうと荒れ狂う／「時」の傲慢な流れは／妨害をうけて止まった

血と涙に遮られ／行進に倦みつかれて／「歴史」は停止した／冷厳な「歴史」すら／混乱して足ぶみした（中略）

東に 西に行くとする／曲折を極めた小大道を／北に南に  
また東南に行くとする／ひとは確実にヒロシマに達する  
広島は東洋にあるが また／西洋に 南洋に 北洋にあるの  
だから／道はすべてヒロシマを指向している

ヒロシマは過去のもの／ヒロシマは現在のもの／ヒロシマは未来のもの

これこそ「文化」が／その心臓を突き刺し／「科学」が／その頭脳に銃弾を打ちこんだ／ヒロシマなのだ

——R・ゴバラクリシュナ「ヒロシマの映像」（一九四六年）より、

時間が流れはじめたのは一九八七年の春のことである。十歳の誕生日を迎えた私はいよいよ親の手に余るようになったらしく、その年から町の小学校に通うようになった。五歳から登校免除で学校に行かず、実家で過ごした幼年の記憶は、疎らな出来事がぼつんぽつんと浮かぶ広大な時間の海である。蜂に刺されたことや、ピクルスの食べ過ぎで腹をこわしたことや、隣の家に住む三つ上の赤毛の娘と裏庭の杏子の木陰で手を繋いだことは覚えている。

しかし記憶を掘り起こしてみても、連続的なシークエンスは一つも思い出せない。一方、学校に通いだすと、毎日の時間はいくつもの出来事で細かく刻まれ、休む時間と勉強する時間、外で遊ぶ時間やトイレに行く時間が全て校内放送のチャイムによって定められるようになり、時間が流れた。一九八七年のことである。

松田聖子の「Strawberry Time」が日本でヒットしたその春、遙か南にある私の国では、次の曲がラジオから流れていた――

湾口で／ある普通の日の始まり

彼らは魚網を引き上げ／船のへさを陸に向けて  
家々の屋根の上に／飛行機の音がかすかに聞こえる

……十七秒後、世界は爆裂する

夜を葬るすばらしい日の出  
フレイブ・ニュー! サラライズ

剣の一撃で／血のように赤い日の出

漁師たちの顔を／もう見ることはできない

残るのは壁に／焼きつけられた彼らの影だけだ

そして寺内には／竹も新たに芽生える

まるで炎が／跡を残さなかつたかのように  
サラライズ

東の空に明かりが差す――日の出

日の出から逃げる場所はない  
フレイブ・ニュー! サラライズ

夜を葬るすばらしい日の出

剣の一撃で／血のように赤い日の出 …… (以下省略)<sup>3</sup>

オーストラリアの人気バンド Teahouse の「Sunrise」という曲である。「十七秒」というのは Little Boy が広島上空で投下されてから、起爆装置が作動するまでの時間である。) 切れのいいギターやリズム

のめりはりは子供の私の耳に残った、しかし歌詞については不思議にぼんやりした印象を受けた。そもそも悲しい曲なのかどうか判断に困った。漁師たちの顔がもう見られないのは確かに寂しいが、「新しい日の出」ならむしろ喜んでいいじゃないか?

この曲の《意味》を知ったのは、翌年、小学校六年の歴史の授業で世界史を勉強した時であった。というのは、頭の中に確かに保管していた様々なイメージ(キノコ雲、ICBM、放射能宿酔やケロイドで苦しむ女)が一つの光景にまとまり、会話、テレビ、映画、本など様々な媒体から拾った種々の要素が「原爆」という《物語》を形成し始めたのはこの時であった。学校の歴史教科書では、「ヒロシマ」「ナガサキ」は、戦争史と戦後史との間に挟まれ、戦争の中から平和を導き、また平和の中から戦争を導く恰も神話的な大惨事として描かれていた。理解と想像を絶することこそが「原爆」の意味であった。

原爆投下(落下)という行為(出来事)を、歴史という物語に組み込んで行くことは、つまりこのような「意味」を与えることにほかならない。教科書に記される公の歴史、日記に記される私的な歴史、いずれにしてもそうである。物事の沈黙を破り、一語一語苦し紛れに吐き出し、或いは饒舌で苦痛を覆い隠し、或いは昇華することは、いずれ物語化という処理・過程を前提とする。書く者と、また読む者が、様々な情報・映像・イメージの断片を一つのシークエンスに組み合わせる処理・過程で初めて、このどうしようもない実態に「原爆」としての「意味」が与えられるのである。本稿では、一九八〇年代の私の視点から出発して、このプ

ロセスを問題にしたい。

《私》がどこに立って、どこから発言しているかを確認することで、個人の立つ場所と《爆心地》との間の《距離》を初めて対象化できる。具体的には、私は例えば「オーストラリア」という英語圏・旧連合軍の一部で、一九八〇年代の中で「原爆」を初めて知った。それは、原爆投下からの四〇年間の歴史的距離、爆心地からオーストラリアまでの数千キロの地理的距離、日本語と英語との思想的距離、日本と旧連合国との政治的距離、さらに「原爆」を歴史の物語に組み込んでいくときの認識的距離など、様々な次元に於ける《距離》である。この《距離》こそが、私などの「原爆」体験を特徴付ける。というより、私などの「原爆」とは、この《距離》そのものの痕跡にほかならない。

実際、連合軍側の「原爆」言説と日本国内のそれとを同一視できないことはいまでもない。しかしその相関性は否めない。モニカ・ブラウや武市銀次郎の研究でも分かるように、戦後日本に於ける「原爆」言説はGHQの情報流通制御（プレス・コードなど）に於いて、占領軍のポリシーによって規定された。この情報制御は海外メディアに於ける「原爆」の語り方にも大きく影響した<sup>4</sup>。なお後述のように、アメリカをはじめとして、英語圏の「原爆文学」もかなり早い段階から日本に紹介され、日本の中の「原爆」理解にも顕著な影響を与えている。

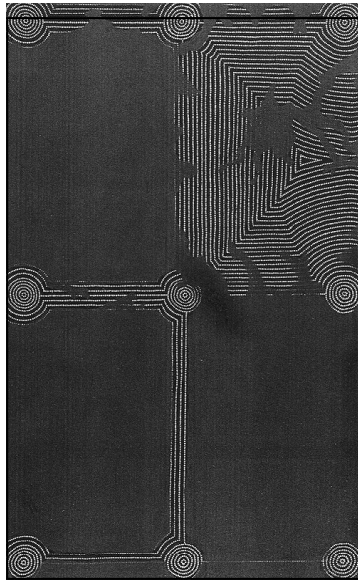
一九八〇年代といえば「ノー・モア・ヒロシマ」が「ノー・モア・ユーロシマ」に展開し、《核の脅威》に対する認識が世界規

模の反核デモに展開した時代である。核軍備競争を詳細に分析し、反核運動の後押しとなったGround Zero著『Nuclear War: what's in it for you?』は一九八二年に発表された（当時東京新聞外報部次長だった高橋正の日本語訳『核戦争―ある晴れた日、地球の終わりがやってくる。』は半年後スマイルから出た）。訳者前書きで高橋は「反核の新しい波が世界中に広がっている！私たち日本人の（ノー・モア・ヒロシマ）の声は、戦後長らく、無人の荒野に向かって、ひとり空しく呼ぶの観があった。しかしながら、ようやくにして、事態は変わりはじめた」と多少大げさに書いているが、確かにこの時期、国際的な反核運動は目立ったといえよう。一九八三年三月二十三日にレーガン米大統領は所謂「スター・ウォーズ」演説で、戦略防衛構想（SDI）を「核兵器を無力化し、時代おくれの廃物とする手段」として発表し、「核兵器の誕生以来、我々は厳しい報復を断言することによって攻撃を防いできた」とし、核兵器の数を減らす方針を表明した。

オーストラリア国内に於いても《核》への関心は高まった。その焦点となったのは、本土中南部のマラリンガ（Maralinga）という地域であった。ここで、一九五〇年代後半に大規模な核兵器実験が英国軍によって十数回行われたが、当時、オーストラリアのメディアは政府の指示を受けて報道を控えたため、一般に知られなかった。その事実は一九八〇年に入ってやっと明るみになった。知られるきっかけとなったのは、従来マラリンガ地域で生活を営んでいたジャルジャ族の土地返還運動であった。一九八四年に「ジャルジャ先住民土地権法」は南豪州政府によって可決されたが、

当時、問題の土地はまだ放射能に汚染され、住める状態ではなかった。一九五〇年代の実験や土地の浄化責任をめぐって、一九八四～五年にマリリング調査委員会が設置されたが、浄化作業はそれより十六年かかり、現在でも土地の安全性について疑問は残る。

政治的な面では、戦後体制に於ける豪英関係という文脈に於いて、マリリング事件は注目すべきである。一九五〇年代当時の自由党政権の親英的な政策の一環にすぎなかったのか、或いは核兵器開発に対するオーストラリアのより積極的な参加が期待されたのか、現代でもなお議論されている。



Jonathan Kamantjara-Brown,  
*Maralinga Story* (1992)

一方、マリリングをめぐる闘争が明確に示すもう一つの問題点は、核兵器保有国ではないが、マンハッタン計画の当初からウラムウム供給国であったオーストラリアの「原爆」に対する不確かな立脚地である。《どちらかといえば加害者》という意識は、マリリングに於いて土着土地権の問題と交差して、《加害者》とし

ての過去を再び掘り起こすきっかけとなった。しかし、情報の発掘に必ず伴うその《処理》——国家レベルに於ける《処理》——の痕跡も、ここには顕著である。

マリリング調査委員会が設置された同一九八四年にオーストラリア人フリー・ジャーナリスト、ウィルフレッド・バーチエツト (Wilfred Burchett) は『Shadows of Hiroshima』を発表し、連合軍による原爆《処理》を批判した(連合出版『広島TODAY』という日本語版は同年内に出版された)。バーチエツトはハワイ人のレスリー・ナカシマ(日本語名・中島寛)に次いで被爆後最も早く広島を訪れた外国ジャーナリストであり、一九四五年九月五日の『Daily Express』紙(ロンドン)で放射線病の実態を最初に報道した彼の記事は広く知られている——

広島三十日目 生き残った者は《原爆疫病》で死んでいく  
——「世への警告」として、これを書く——

広島では、初の原子爆弾が街を破壊し世界を揺さぶった三十日間後の今日、人々は次々に奇怪な死に方をして亡くなっていく。あの大異変の中で負傷しなかった人々も、原爆疫病としか表現し得ない何ものかのために死んでいくのである。

広島は爆撃された都市には見えない。むしろ、巨大なスチールローラで均されたかのように、無残に押しつぶされた都市である。以下、広島の実実をできる限り冷静に述べる。それが世界への警告となることを願う。

バーチエツトの記事はそれ以前の報道と異なり、原爆の科学的《効果》を証明する物理的な破壊ではなく、人体に於ける放射能

の長期的な影響という《副作用》に注意した。後述のように、この観点は当時連合軍が行っていた原爆《処理》と相容れないものとして、当局によって強く否定された。

バーチエット自身も『Shadows of Hiroshima』（一九八四）の自序に「核戦争の脅威が私たちの最も大きな懸念になった今日に於いては、当初広島で起こったことを書き残す義務を感じる」と書いているが、核戦争の脅威がずっとエスカレートしているように見えた一九八〇年代半ば、「ヒロシマ」を媒介としての「世への警告」は、私を取り巻く《核時代》の背景であった<sup>11</sup>。

## 2 「道はすべてヒロシマを指向してゐる」・神話と同化作用

私が高校に上がった年、日本語のクラスは六月から七月にかけて千羽の折鶴を折り、広島島の平和公園にそれを納めに行くため、必死で募金活動を行っていたことを覚えている。私は当時日本語を勉強していなかったので参加しなかったが、七月半ばに「ヒロシマに行く！ヒロシマに行く！」と涙を流して喜んでいいる友達の様子に唖然とした記憶がある。——お前は《メツカ》に《巡礼》にでも行くつもりか？そこで《聖遺物》でも拝んでくるのか？——《反核》の時代に育った私はむしろ「原爆」に無関心ではなかったが、しかし、なぜわざわざ高いお金を出して広島まで行くのか分からなかった。聖地に《巡礼》すれば《悪》から救われるとも思っているのか？

周知のように、一部の「原爆」言説には、人間が日常生活を営

んできた広島と長崎という現実の都市とは別に、「被爆」の代名詞として、或る普遍性と強力な象徴機能を持つ「ヒロシマ」「ナガサキ」という言葉が使われている。これは「ノー・モア・ヒロシマ」という詩人ジェームズ・カーカップの言葉が、一時期反核運動の標語のように使われていたことにも伺える。「広島」は都市、つまり《物》であるが、「ヒロシマ」は物語、つまり《事》である。そして地理的にも時間的に被爆（地）からもかけ離れた一九八〇年代のオーストラリアでは、「ヒロシマ」は一種の《神話的》機能を持っていた。《神話》だからといって現実性が薄い訳ではない。《神話》ほどリアルな物語はない。「ヒロシマに行く！ヒロシマに行く！」と騒いでいた友達の涙には、「原爆」という《原点》に巡礼でき、「ヒロシマ」という《神話》に参加できるという真剣な期待があったにちがいない。

一九四五年八月当時の英語圏の新聞報道やその後の文学では、原爆投下の事実は度々神話的、ないしはアレゴリー的な意味を与えられ、これに於いて吸収され同化されたのである<sup>12</sup>。例えば、イギリス・モダンズムの代表的詩人の一人、イーディス・シットウエル (Edith Sitwell) の『原子時代の三部作』（一九四五）がある。第一部「新しい日の出への挽歌」の末尾には——

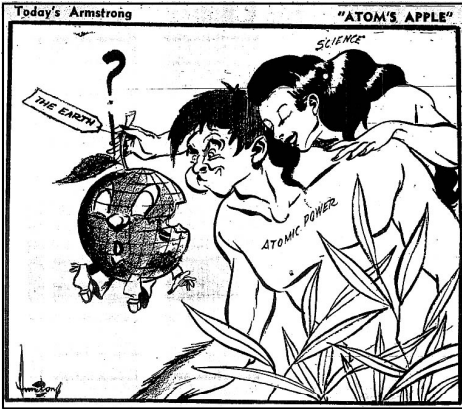
かつてものをみつめた瞳 かつてくちづけた唇はなくなり  
／または落雷にうたれたように黒くなってよこたわり 殺害  
された太陽に向って歯をむきだす／生きてゐる者は盲いに  
みつめていた者は死んでもよこたわった／さながら愛し  
合っているかのように……もはや憎しみはなかった／そして

もはや愛も 人間の心は逝ってしまったのだ<sup>13</sup>

「原爆」の「殺害された太陽」若しくは「死の太陽」（ジャン・ペロール「遠い国から」一九六五）は「人類」への「罰」というアレゴリー的な意味を与えられる。（これは原爆投下を報道して「恰も落雷のように」などと叫んだオーストラリアの新聞に共通している。）

このプロセスによつて《行為》が《出来事》に同化され、政治・軍事的な《目的》が抹消される意味では、一種のイデオロギーとして機能している。原爆の使用を「純潔の喪失」にアレゴリー化するアメリカの漫画家ロジャー・アームストロング（Roger Armstrong）の描いた「Atom's Apple」では、エバール科学がアダム原子力に《善悪を知る樹》の実で地球を食べさせる<sup>15</sup>。原子力に

《目覚めてしまった私たち》が地球に及ぼす脅威がアレゴリー的な文脈に昇華されていく。歴史の擬人化によって、《人間》という個別的な主体が逆に隠蔽される。オーストラリアの有名な画家・作家ノーマン・レンジー（Norman Lindsay）の漫画では日本もアメリカも登場しない。原爆と剣をもつ



て、猫背の科学の前に現れたネメシスが人類に問いかける——「小さき人よ、選べ！戦争の終わりか、全ての終わりか。」<sup>16</sup>



しかし「イデオロギーだ」とか「隠蔽だ」と言ったところで、すんなり肯いてくれなくていい。実際、問題はこんなに簡単ではない。ここで注意すべきは、GHQの情報管理、戦時中の情報戦の尾を引く原爆投下の正当化とは別の次元に於いて、原爆投下という事実が既存の倫理体系の中で「世界化」され、吸収・理解・同化されている事実である。

### 3 広島以前のヒロシマ、「0の曙」と空白地帯の捏造

実際、「ヒロシマ」という《神話》は、一九四五年より以前から既に形成され始めていた。この動きは英語圏の新聞メディアに於いて最も顕著である。

科学史家スペンサー・ウィアートも指摘するように、二十世紀

の原子力に関する公的言説は、科学的開発に反応したというより、むしろ科学的発展に先駆けて《核時代》の像を描いてきたのである<sup>17</sup>。一九〇四年半ば、ラザフォードと共に原子核の解明に努めたイギリスの物理学者フレデリック・ソッデー (Frederic Soddy) はオーストラリアで公演を開いた。その際、「パイアント (約〇・五リットル) のウラニウムには、ロンドンからシドニーまで、大型船を一往復走らせるだけのエネルギーがある」というソッデーの発言は、石油に取って代わる新しいエネルギー源としての原子力の可能性を示すものとして、パースの『Morning Herald』紙にも掲載された。この可能性について、第一次世界大戦を軸として、二十世紀前半を通して英語圏の新聞メディアで広く議論されていた。

日本でも、原子力は社会の不況・停滞を打開し、ユートピア的な未来への途を開いてくれるだろうという期待を持つている人もいた。例えば『中央公論』の大正五年一月号に載った思潮評論「生命の凱歌」では、評論家・中澤臨川は第一世界大戦、不況などを取り上げ、「大正四年は世界的に最も由々しき歳であつたと同時に、日本からすれば、(大正天皇の——引用者) 御即位以外には、最も醜い歳であつた」とし、「政党も意気地がなければ、国民も意気地がない。実業の方面でも、芸術方面でもが、新しい顕象一つ、新しい人材一人出さずに、社会一般が重苦しく淀んだ空気に黙せられ」たと述べる。一方、「科学の力は無限である。最近に於ける電子と放射体との発見は、今回の欧州戦争よりも大事件であらねばならぬ。之が人類の未来に及ぼす幸福には計り知るべか

らざるものがある」と、政治の「こたごた」から超越したヴィジョンを描いている<sup>18</sup>。

同じ観点は一九二七年から『New York Times』の科学部編集長を勤めたヴァルデマー・ケムフェルト (Waldemar Kaempfert) によって展開され、またオーストラリアの新聞に鵜呑みされて伝導された。以上ふれたウィアートの指摘によれば、ケムフェルトの樂觀的ないし理想的な報道は、世界の石油供給に対する読者の不安という、もろに経済的な関心を刺激して、高い人気を呼んだ。「ケムフェルト等にしてみれば、エネルギー供給は人類にとつての重要な課題であつた。(中略) 彼らの手によつて、放射能という未知の力は、未来の文明が人類にもたらすに違いない様々な驚異的な発明の象徴と化した」<sup>19</sup>。

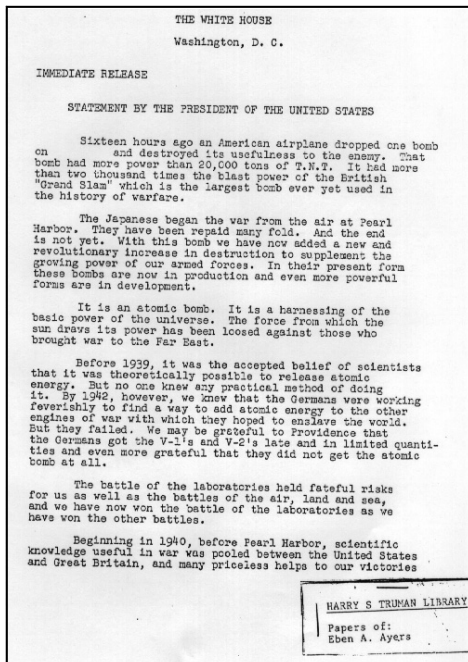
原子力がもたらしてくれるであろう理想的な未来に対するオーストラリア人の期待は、「原爆投下」という現実によつて生まれたのではないし、またそれによつて消滅した訳でもない。例えば、広島への原爆の投下をタスマニア島の住民に伝えた一九四五年八月八日の『The Mercury』紙では、原爆投下の報道とともに、「新しい原子力の可能性——十五年以内にはティーカップ一杯の燃料で大型船を走らせる原子力エンジンが開発されるだろう」という書出しがあり、四十年前のソッデーの発言が原爆報道の一環として再生されている。

一方、原爆の《破壊力》を神話化する様々な物語も、実際の原爆投下に先駆けて普及していた。「atomic bomb」という言葉が初めて活字になったのは、H.G.ウェルズの小説『The World Set Free

『解放された世界』(一九一三)であったが、これもやはり「フレデリック・ソッディーに献呈する」という辞から始まる。ソッディー自身も一九〇三年のエッセイで、核分裂の連鎖反応の可能性について、「地球はまるで火薬倉庫のようだ。私たちの想像力を遙かに超える破壊力をもつこの火薬に火が点けば、地球は混沌に帰するだろう」と書いている。一九三九年に、デンマークの電子物理学者ニールズ・ボーアが米国で発表した核分裂の原理を種として、核兵器の可能性をめぐる議論は英語圏の新聞科学欄に於いても見られるようになった。要するに、一九四五年八月六日、世界のメディアがトルーマン大統領の原爆投下発表を報道した時には、「ヒロシマ」の原型は既に用意されていたのである。

下の図は世界のメディアで報道されたトルーマン大統領の八月六日声明の一部であるが、二万トンのTNTという比較によって放射能の存在が隠蔽されていることは明らかである。本田一二も指摘しているように、原爆の放出するエネルギーの約一七％は熱ではなく放射線によるので、その威力をTNTの放出するエネルギーに換算して示すことは適正ではない。しかし、これは放射能の「隠蔽」だけの問題ではない。

一九四五〜六年に於ける原爆言説の形成に最も深く関与していた個人は、おそらく、アメリカの『New York Times』科学部記者、ウィリアム・ローレンス (William Laurence) だっただろう。ローレンスが率いる記者団は以上ふれたウィルフレッド・バーチエツトと同じ「三十日目」に広島に着いたが、その報道はバーチエツトと対照的である。ローレンスは『New York Times』で勤めながら、一方、一九四五年五月にマンハッタン計画の報道局長に就任し、原爆当時にはこの二つの任務を掛け持ちしていた。記者にしてマンハッタン計画の秘密を知っていたのはローレンス一人であった。アラモゴルドでの原爆実験に立ち会い、八月十日の朝にプ



ルトニウム原爆「Fat Man」を長崎に投下した爆撃機隊に便乗した。八月六日の朝に驚いた記者団の前で読み上げられた「大統領よりの声明の最初の草稿を書いたのもローレンスであった。核時代の到来に関するローレンスの見解は『New York Times』をはじめ、世界中の新聞面に掲載された。既述のように、ローレンスより数時間先駆けて広島から電報を打ったバーチエツトは『Shadows of

Hiroshima』(一九八三)で、ローレンスが当時の報道で原爆の事実を美化したとして、厳しく批判した。「原爆の皆殺しを『凄まじく美しい(Awesome beauty)』と誉めそやした記述に対して、ローレンスは後にピューリッツァー賞を受賞し、陸軍省から勲章を受けた」<sup>32</sup>。

ローレンスのマンハッタン計画回想録『0の暁』(原本一九四六年)では、彼自身はマンハッタン計画への関与について次のように書いている——

「一つ貴方にわれわれのために働いてもらいたいのだが」  
とグローヴス大將はいった。

「私は長いこと、その機会を待っていたのです。何時から始めましょうか」(中略)

こうして私の「軍神の原子の国」の旅が始まった。そして私の旅は、ついに一九四五年八月九日二時一分、長崎の上空七マイルのクライマックスに到着した。そして私は第二回目で、そして最後の原子爆弾が戦争に用いられ、火の柱となつて六万フィートの成層圏に達し、史上最大の戦争に勝利の止めを刺すのを目撃したのである。<sup>33</sup>

ローレンスに対する個人的な批判はさておき、原爆の《効果》を強調し、『副作用』を隠蔽した占領軍の検閲とプロバガンダは被爆地の個別的な事実を読者から遠ざけたことは否定できない。

バーチエットの報道は九月三日の夜にモース信号で東京の『Daily Express』特派員に送信され、五日の朝刊に掲載されたが、同日に占領軍の横浜報道局から次の報告が『New York Times』宛に送り

れたという——

合衆国機甲隊が土曜日に予定されている東京進出の準備を続ける今日、首都から通信員の完全撤退命令が再び発せられた。(中略)また占領軍本部では、日本側の報道に対し「我々は敗北したが、勝利者たるアメリカの寛容さに期待する」というオフィシャル・ラインに沿って厳しい検閲が実施されている。今日から(外国の)通信員の行動範囲は横浜に限定され、検閲を経ってから配布される日本側の報道の翻訳に基づいて記事を書かなければならない。<sup>34</sup>

同月十三日に同紙に掲載されたローレンスの被爆地報道「広島跡には放射能がない」はバーチエットの「原爆疫病」の存在を否定し、報道の対象を人身(放射能病)から無機物(残留放射能)にすりかえている——

今日、陸軍省原子爆弾開発部長ファレル准将は広島を調査した結果、兵器の爆発力は発明者の予想を遙かに超えるものと発表された。一方、被爆地に於いて残留放射能や毒ガスなどは存在しないと断言した。(中略)ファレル准将が率いる科学者団体の調査結果によれば、広島に移った九月九日時点では放射能が残留している証拠は全く見つからず、現在被爆地で暮らしても安全だと発表した。(中略)「標的地は殆ど完全に破壊された。都市の建築物の八〇〜一〇〇%——凡そ六万八千軒——は破壊された」という。

このような報道によって、人身・政治・社会の「たごたごたは、標的地」の「殆ど完全」なる破壊にすりかえられ、広島は政治的な

《空白地帯》として描かれた。つまり、戦前からの《ヒロシマ》原型がそのまま利用できたのである。ソッディーが一九〇三年に予言したように、「混沌に帰」してしまっただかのように報道されたのである。広島は「0」の曙、《神話》の時間に戻された。

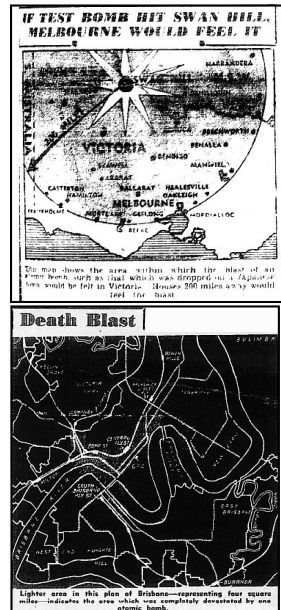


Arthur Boyd, *Melbourne Burning* (1946-7)

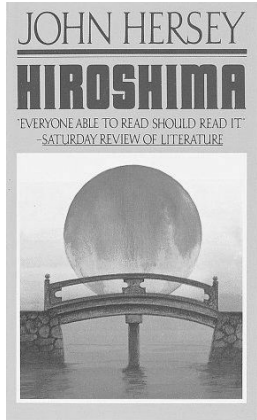
ところで、この位置付けは、被爆に対する一種空想的な《疑似体験》を可能にし、この可能性は「もしも私たちの町に原爆が落ちたら…」という形で、一九四五〜六年まで様々なメディアに於いて表現されている。

#### 4 ブレイブ・ニュー・サンライズ

一九八九年の春、ジョン・ハーシーの『Hiroshima』（一九四六、『New Yorker』紙に発表）という、被爆者の聞き調査に基づくルポルターージュは僅か五ドルという手軽な値段で再版された。当時、私はそれを学校の図書館から借りて読んだ覚えがあるが、あまり印象に残らなかった。おそらくもつとグロテスクな物語を期待していたにちがいない。唯一印象的だったのは本の表紙である。平戸の眼鏡橋、広島縮景園の石橋、或いは東京オリンピックの宣伝ポスターを何となく連想させるエキゾチックなカーブを描いて緩やかに盛り上がった橋の上を、赤く燃える日の丸が昇る。橋の下の穏やかな水面は太陽の色に染まっている。キノコ雲も瓦礫も人間もない「日の出」の光景である。この描き方は、原爆が広島に落とされた朝の時間帯（八時十五分）を表現しているだろうと、その当時考えてみたりもしたが、夏の朝八時では、太陽がとつく



に昇ってしまったているはずである。二年前に聴いていたあの「Sunrise」という曲と重ねて考えた方が、よっぽどわかりやすかった。



しかしなぜ「日の出」なのだろうか。燃え上がる赤い太陽を、破壊の炎焰とも、帝国日本の「日の丸」とも読める。「日出づる国」のイメージは原爆と緊密に結びついていることは或いは当たり前なことであろう<sup>38</sup>。国家という枠組みで考えるならば、原爆は日本に投下された。しかし、「原爆」は日本でなければならぬ、という必然的な結びつきは、それ自体必然的なものではない。むしろ「原爆」の問題をマンハッタンから広島・長崎へ（或いはアメリカから日本へ）と転嫁する正当化の口調と、一方、大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』（一九六五）にもみえる「被爆国民」としての日本人の位置付けという二重の《処理》を受けた「原爆」言説に由来する。オーストラリアに関して言えば、戦争当時侵略して来るかもしれない日本帝国に対する恐怖は、歴史的・地理的な孤立感に重なり、戦後になってもなお「原爆」物語の形成・受容に影響を与え続けたのである。特に原爆投下直後の文字メディアでは、新しい時代に於ける原爆（核兵器）の脅威への不安は、日本軍の南進作戦に対して覚えた恐怖の余韻と響き合った<sup>39</sup>。

「原爆の父」とも呼ばれるJ・ロバート・オッペンハイマー（マ

ンハッタン計画ロス・アラモス研究所初代所長）は、投下発表直後に「原爆の感想」を記者団に聞かれた際、彼がヒンズー教の聖書 *Bhagavad-Gita*（神の詩）から引用した言葉は、アメリカをはじめ、世界の新聞で直ちに報道された——「私は『死』である／もろもろの世界の大破壊者である／人々を滅ぼすために此処に来たのだ」、そして同じ詩から「大宇宙の支配者（中略）千の太陽の如く輝く」（第十一章三十二節、第八章第九節—引用者訳）。詩全体の文脈は問題ではない。むしろ「私は『死』である」「千の太陽の如く輝く」という孤立した言葉だけが、原爆投下を《処理》するに当たって重要な神話化機能をもったことは注意すべきである。「太陽」の輝きとの結びつきの一つはここにある。千の太陽の如く輝く「死」としての原爆は、人間による極めて冷静な軍事的計画の実行ではなく、特定の《人間行為》に還元できないより大きな（＝抽象的な）《意味》を与えられる。

スペンサー・ウイアートも指摘しているように、死と再生の象徴としての太陽の神話的機能は、多くの「原爆」物語にも見られるし、これは「死」を吸収しながら生長するキノコ（雲）のイメージについてもいえる<sup>40</sup>。

当初から、原爆投下の正当性——必要性または必然性——を主張した言説は、その観念的な拠点をこの「原爆」物語（神話）に置いたのは既述の通りである。しかし、一方、英語圏の中から原爆投下に反発して、「ヒロシマ」「ナガサキ」の悲劇を描いた文学作品の多くもまた、同じ「原爆」物語の構造に吸収された。というより、限定された情報を《処理》して「原爆」を書くことは、

この吸収・理解・同化の過程を反復することに他ならなかったのである。これは一九四五〜六年の新聞記事や文学作品に於いて最も顕著であるが、一九八〇年代、子供の私に教育された「原爆」の位置づけもおおそそであった。

中学三年の時だっただろうか、はつきり覚えていないが、当時科学少年だった私は文学の教科書を開いて、本稿の劈頭で引いた「広島映像」(ゴバラクリシユナ著、一九四六年)を読んだ。なぜかこの詩は記憶に残った。「時間」は止まった／高潮に達すると穏やかであるが／下げ潮に向かうと荒れ狂う／『時』の傲慢な流れは／妨害をうけて止まった——ここで連想されるのは、永遠に八時一五分(または一一時〇二分)を指したままになっているあの有名な被爆時計の映像であろう。むろん、時間が物理的に止まったのではない。括弧付きの「時間」は固有名詞である——つまり私たちの「歴史」としての「時間」であり、「高潮に達すると穏やかであるが／下げ潮に向かうと荒れ狂う」その進展(進化)は、原爆の完全破壊という「妨害をうけて止まった」。

この詩を訳した大原三八雄も指摘しているように、「広島映像」を含めて、この時期に外国から広島市に寄せられた多くの詩文は「原爆の惨害、恐怖、平和希求を描くことの難しさを物語っているし、とかく作品自体観念的に陥り易い傾向がある」<sup>31</sup>。敷衍していえば、ここにも、以上述べたような神話化ないしはアレゴリー化が施されている。最後の節では「これこそ『文化』が／その心臓を突き刺し／『科学』が／その頭脳に銃弾を打ちこんだ

ヒロシマなのだ」とあるが、「文化」と「科学」はアームストロングの「アダム」と「エバ」と同じぐらい抽象的である。

「歴史」はどうだろうか。「時間」は止まった」宣言から始まるゴバラクリシユナの語りの時間はどうか。「時」の傲慢な流れは妨害をうけて止まった——「時間」の停止から始まる「時間」、「時」の死から生まれる「時」の後世は「ヒロシマ」の時代である。「道はすべてヒロシマを指向している」(現在時制)はこの後<sup>32</sup>「歴史」時代の標語のようにも聞こえる。エドモンド・ブランドの「ヒロシマ」(一九四九)を連想する——「ヒロシマよりも誇らしき／名をもつまちは世にあらざ／君は平和の鳩の巣よ／おちこちびとはここに来て／よみがえりたる人類の／かがやく姿見るらんか」<sup>33</sup>。しかし同時に、『啓蒙の弁証法』的な悪夢——一方には『時』の傲慢な流れ、他方には神話の大量消費や無限に複製されるヒロシマ、ヒロシマ、ヒロシマ。

冒頭で引いたアイスハウスの曲「Sunrise」の「すばらしい日の出」<sup>34</sup>はアルドス・ハックスリーのSF小説『すばらしい新世界』(一九三二)を強く連想させる歌詞である。「科学」が暴走して没入道的な未来を来たすというアレゴリー的な「原爆」物語については既にふれた。ハックスリー自身も一九五〇年の再版に寄せた自序で次のように書いている。「核分裂への言及がないことは、この小説に於ける最も明白な欠点の一つである。執筆の数年前から、原子力の可能性は既に話題の種になっていたし、私が核分裂について書かなかったことは、振り返ってみたらむしろ変である」<sup>35</sup>。

「Hiroshima」エドモンド・ブランドン(Edmund Blunden)の誌

は一九四九年に広島市に寄せられた。七五調を貫いた寿岳文章の日本語訳は次の節から始まる——

かの永劫の夜をしのぎ／はやもいきづくまぢびとの、  
うちひしがれてうつつをも／夢ともわかぬ、ひとこととの

うらみも言わで、颯爽と／立ちあがりたる、心意気<sup>34</sup>

七五調は聖書や古代ギリシヤの詩を訳す時によく使われて来た韻律であるが、ここでは少々場違いな感じがする。おそらく、こういった訳し方が用いられたことには、アレゴリーとしてのヒロシマの機能が関係している——この日本語をすんなり受け入れるためには、「原爆」が《神話》として既に《処理》されていなければならぬ。そして人間的・政治的な「たごた」を超越して、「君は平和の鳩の巣よ／おちこちびとはここに来て／よみがえりたる人類の／かがやく姿見るらんか」（第三節）というふうには、「うつつをも夢ともわかぬ」「永劫の夜」から目覚めた「人類」を主体とした《神話》と置き換えられている。

翻訳の問題は別として、A.F.ブライアントの「柔和なるもの地を嗣がん」（一九五三）は中世ヨーロッパ的な《ヴィジョン》を連想させる設定で、《神のお告げ》としての「原爆」を語っている

高い岩山の上に立って——／うつつなのか夢なのか

地球がひらたく広がって／海と河とがかがやいている

（中略）

と見るまに巨大なきのこ雲／轟音はつげる世の終り

町々は視界から去り／うす黒い煙がたちのぼる

やがて煙は消えさつたが、／男も女も人影一つ見えない  
怨深い運命の女神は／一人だに残すことをしないのか

世界にくまなく生命をたずねて

やつとわたしの兄弟を探しあてた

生き残ったエスキモーと黒人と／かれらこそ世を嗣ぐもの<sup>35</sup>  
この詩に於いてもヒロシマは一種の「夢」の目覚めに喩えられている。「原爆」の時間は《神話》の時間、或いは夢の時間（測定可能な時間の流れの外側にある「永劫の夜」）として抽象化される。

小学生の私は「原爆」を悪夢の別称と考えた。そして「ヒロシマ」をその悪夢の「目覚め」として、または「日の出」<sup>サライズ</sup>として認識した。しかしそれは夢の終わりを意味するのではなく、逆に悪夢が現実になつた瞬間だと理解した。

様々な媒体に表現された「目覚め」のメタファーは、以上ふれたように、或る場合、原爆投下や被爆地の人間性や政治性を覆い隠すための仕掛けとして機能している。しかしそれだけではない。柄谷行人も指摘しているように、夢の物語化とは「夢の世界」の切迫感と「たごた」した内容を《処理》（柄谷の言い方では「理解」）することであるが、一方その内容との「距離」の導入をも意味している。この距離の導入によって、「夢」を「私という物語」に組み込むことが初めて可能になるとしている<sup>36</sup>。しかしここで注意すべきは、この行為によって、語る私の立場は「夢」の外側として確立する。目覚めは私の夢を立ち上がらせる（意味を与える）《処理》であると同時に、また「現実」に於ける「夢」の切断である。目覚めという切断によって、私の語りが初めて成立する。

「原爆」を夢として物語る(《処理》する)行為にも、このような切斷が機能している。純潔の喪失、だったり、または後・近代としての核時代の始まりだったりするが、「ヒロシマ」の時間は「曙」ないしは「日の出」の時間として描写されるとき、それは目覚めた際に於ける夢の切斷、処理と自己確立にはかならない。

傲慢なエゴが消滅し、「エスキモーと黒人」という「下層」の象徴が表面化して来る「夢」。そして日が昇り、時間が流れ、夢の目覚めは即ち戦後のヒロシマである——「エスキモーと黒人」ではなく、米軍の白人指導者が指導権を嗣いだ現実と神話である。

文学は、ごたごたを《処理》するための道具ではない。逆に問題を多方面に開くための措置であらねばならない。以上引いてきた全ての著者に一貫している事実は、彼らが一人残らず広島を訪れて、被爆地での「体験」に基づいて書いていることである。つまり、この《神話化》は実際の情報や関心の欠乏に因るものではない。これらの著者にとって「ヒロシマ」は決して遠い場所ではない——むしろ、或る身近で切実な問題への手がかりにほかならない。要するに、彼らの「ヒロシマ」は、神話的ないしはアレゴリ―的な表現が、最もリアルに響く、そういう空間である。理解と想像を超越する瞬間の空白を、どうにかして覆おうとする必死の試みにもみえる。しかし彼らの「ヒロシマ」の跡に残るのは、主語を抹殺されてしまった空白地帯と、「原爆」というどうしようもない《距離》だけである。

私もまた広島に行く。被爆地を訪れる体験で自我を没却し、平和記念資料館という異様な空間の中で修学旅行生の団体に紛れ込

み、巡礼の儀に参列する。資料館の薄暗い中から外の公園に出て、白い陽しの下で立ち止まり、眼を擦る。そして時間が再び流れ、だす。

## 注

1 Victor Rubinは一九五〇年生れ、シドニー出身の画家である。図はメルボルンのモナッシュ大学美術館主催『*Nuclear r(a)ge*』(Clayton: Monash University Gallery 一九九三)を典拠とする。

2 この引用は大原三八郎(編)『世界原爆詩集』(角川文庫、一九七四・八)所収の編者の日本語に拠る。この詩は当時広島市長浜井信三宛てに送られたそうである。「原爆投下に怒りを覚えて広島市に寄せられた作品は、二十篇を下らない。国籍もさまざまであるし、言語も多様をきわめ、国際色にとんでいる」(同上書「あとがき」、三二六頁)。

3 On the edge of the bay/ A day just like the next/ They gather their nets/  
And face their boats around  
Over the rooftops/ Hear the hum of wings/ In seventeen seconds/ The world explodes

And it buries the night a brave new sunrise/ With a sweep of the sword, a blood red sunrise ... (以下省略)

—— Iechouse 『*Man Of Colours*』 (Iva Davies/Robert Kretschmer, Polygram 一九八七)、引用者訳 (以下同様)。

4 Monica Braw 『*The Atomic Bomb Suppressed: American Censorship in occupied Japan*』 New York: M.E. Sharp 一九九一。武一銀次郎「マ

- メリカの対日占領期に於ける検閲政策―原爆報道を中心にして―  
 『防衛大学校紀要』第七十三輯、一九九六・九。
- 5 一九八一年から米ソは戦域核兵器をヨーロッパに配備し、「限定核戦争」の可能性は現れた。アメリカ本土が核戦争の被害を蒙らない代わりに、ヨーロッパ大陸は核戦場と化する新しい《核の脅威》に対して、「ノー・モア・ユーロシマ」を唱える反核運動は勢を増した。
- 6 米国家安全保障会議(NSC)の核戦略担当スタッフをも務めた Roger Moranda を理事長として、市民グループ Ground Zero は1981年にワシントンで組織された。
- 7 Ground Zero 著『核戦争』(サイマル、一九八二・一)五頁。
- 8 『Nuclear rage』(同上)に拠る。画家はマラリンガに近く Yalata に一九六〇年に生まれ、この地域の先住民族である。英国による核実験は他にも西オーストラリア州の Monte Bello 諸島やマラリンガより数百キロ北にある Emu Field で行われた。
- 9 Wilfred Burchett 『Shadows of Hiroshima』 London: Verso 一九八四。  
 戦後、バーチエットは核兵器開発や共産主義の弾圧に対して抗議し、朝鮮戦争では北朝鮮側に立ち、反米報道を送りつづけた。
- 10 被爆地の破壊を細かく描写するナカシマの記事は八月二十七日に米国連合通信社(UP)に送られ、「消えた広島 記者は目撃した」という表題で同月三十一日の『New York Times』に掲載された。
- 11 Wilfred Burchett 『Shadows of Hiroshima』(同上)九頁。
- 12 例えば、オーストラリアに於いて原爆投下後の新聞報道では、この神話化はすでに機能している。拙著『平和、恐怖とフランケンシュタイン博士』(『原爆文学研究』第二号、二〇〇三・八)参照。
- 13 ここでは大原三八雄(編)『世界原爆詩集』(角川書店、一九七四・八)所収の日本語訳を引用する。
- 14 The Bulletin (シドニー)社説、一九四五・八・十五、二頁。拙著『平和、恐怖とフランケンシュタイン博士』(同上)参照。
- 15 ここでは一九四五年八月九日、オーストラリアの *The Age* 紙に掲載されたものを複写した。アームストロングはアメリカの画家・漫画家。新聞漫画で名を知られ、後に「デイズニーでも勤めた。
- 16 一九四五年八月十五日刊『The Bulletin』(オーストラリア、シドニーで発行)の表紙を飾ったこの漫画について、拙著『平和、恐怖とフランケンシュタイン博士』(同上)参照。
- 17 Spencer R. Weart 『Nuclear Fear: a history of images』 Harvard University Press 一九八八。アメリカをはじめ、英語圏に於ける「原爆」イメージの系譜に対する研究である。
- 18 中澤臨川「生命の凱歌」(『中央公論』一九一六・一)六二〜六頁。
- 19 同上書、一三頁。
- 20 『Some Recent Advances in Radioactivity』 Contemporary Review 第八三号、一九〇三・五、七〇八〜二〇頁。
- 21 本田一二「原爆投下!『第一報』日米報道比較」(『ジャーナリズム研究』第三十一巻第四号、一九九四・四)一〇二頁。
- 22 Wilfred Burchett 『Shadows of Hiroshima』(同上)一七頁。
- 23 Wil.ローレンス『Oの暁』崎川範行訳(創元文庫、一九五一・一)二一〇〜一頁。
- 24 この引用は『Shadows of Hiroshima』(同上)二三〜四頁を典拠とする。原文は未確認である。

- 25 『Nuclear rage』(同上)に拠る。Boydは一九二〇年にメルボルンの近くで生まれ、オーストラリアの最も有名な画家の一人である。
- 26 『Herald』紙(メルボルン)一九四五年八月七日一面、『Carrier Mail』紙(ブリスベン)同年同月九日一面より。
- 27 John Hersey 『Hiroshima』 New York: Random House 一九八九。
- 28 とところで、J.G.バラードの小説『太陽の帝国』(一九八四、一九八七にスピルバーグの映画化を後にテレビで見た)の最後に、シンガポールで捕虜になった少年ジムは晴天を忽然と照らす白い光を見て、「神がフラッシュを焚いてるみたい」という。
- 29 拙著『平和、恐怖とフランケンシュタイン博士』(『原爆文学研究』第二号、二〇〇三・八)参照。
- 30 Spencer R. Weart 『Nuclear Fear: a history of images』(同上)一五頁。
- 31 大原三八郎(編)『世界原爆詩集』(角川文庫、一九七四・八)三一六頁。
- 32 寿岳文章訳、一九四九年八月に広島市役所に送られた詩である。典故は同上書である。
- 33 Aldous Huxley 『Brave New World』 London: Chatto & Windus 一九五〇、九頁。引用者訳。
- 34 ブランドンはイギリスの詩人であり、一九四五年末に広島を訪れた。一九四九年八月六日に広島市役所に寄され、後一九五〇年八月『新女苑』に掲載された。引用は『世界原爆文学詩集』(同上)による。
- 35 この詩は同著『宗教的信念 かたくななる人のために』(岩波書店、一九五三・一)の冒頭をも飾ったが、ここでは『世界原爆詩集』(同上)所収の有賀鉄太郎訳を引用する。
- 36 柄谷行人「夢の世界 島尾敏雄と庄野潤三」(『文学界』一九七二年七月号)。なお、この論の分析は、拙論『「根っこ」序説Ⅱ』(『大日文』第三号、二〇〇三・十)を参照されたい。